

世界のユース・ホステル運動の変遷

中 村 樗

The changes of world Youth Hostel movement

Ohchi NAKAMURA

The Youth Hostel movement has remarkably developed in recent year and spread all over the world.

As Richard Schirmann started the Youth Hostel movement following from the Wanderfögel movement, the essence of Youth Hostel movement is outdoor education.

But the contents of it has changed from the origin as the development of world civilization.

So I reviewed the world history of Youth Hostel movement and thought how it ought to be.

1. 緒 言

近年都市における人口は急激に増大し、都市生活の結果、人間は孤独化するようになった。また生産様式の機械化によって人間性無視という現象や体力の低下という問題を生じてきた。その上交通、通信の急速な発達のため人間は緊張の連続となった。これらの問題を解決するためにも、都市の悪環境・騒音、煤煙から逃れるためにも野外活動は必要不可欠なものになってきた。野外活動のうちでも特に近年会員も増加し、世界的な運動となっているものにユースホステル*（以下 YH と略す）運動があるが、この運動は、自然を対象とし、青少年にとって欠くことの出来ない身体的・精神的・知的・社会的な体育活動であり、好ましい人間関係を追求する場ではなければならない。

YH 運動の創始者 リヒアルト・シルマン Richard Schirmann がその演説でいつも言ったことは、YH 運動は一般の観光旅行ではいけない。もっと学習的旅行で、特に野外活動が主体となっているものであることである。⁽¹⁾これは彼が始めた YH 運動がワンダーフォーゲル運動を基としていることを考えれば当然のことであろう。本質をわきまえぬことは最もいけないことである。現在の日本の YH 活動*はこの本質をはづれてはいないだろうか。YH は単に安い観光旅行をするための基地となっているにすぎないようにも思われる。

リヒアルト・シルマンを助けて、YH 運動を今日の世

界的運動にまで仕上げた蔭の人 ウィルヘルム・ミュンカー Wilhelm Münker が 1964 年 11 月に JYH（日本 YH 協会）理事長の横山祐吉宛に出した書信には次のような言葉がある。⁽²⁾

「(前略) この間お会いした時にいったように、ドイツの YH 運動はうまくいっていません。このことは、欧州の YH 運動につき全般的にいえることでしょう。ナチス体制に入る前の 1933 年にはドイツ全体で 2,100 の YH があり、今の西独地域には 1,200 あったのにこれは今では 700 となり、ごく最近の数字では 679 と減少しています。宿泊数は相変わらず八百万を維持しています。この中には YH 運動本来の姿である徒歩旅行者とは何のかかわりもない数が多く含まれています。(太字・筆者)

33 年頃には、ホステラーは三晩以上一つの YH に泊れませんでしたが、ホステルからホステルへと渡り鳥のように移動するのが建前でしたが、今日では一週間も二週間も滞在します。そしてホステルの中には保健機関の子供たちを、収監をますために受入れる所さえあります。他方、ホステラーも変り、大事な構成員である 15 才から 25 才までの勤労青年達は 徒歩旅行を好まなくなりました。20 年前にはめざましい活躍をしていた学生達も減りました。この点に関して、日本での学生達の活動の有様を聞いて、うらやましくさえ思っています。ドイツのワンダーフォーゲルは第一次世界大戦と同時に消滅してしまっただけでも過言ではありません。あんなに盛んだった自転車旅行もです。工業のめざましい発展がもたら

* Youth Hostel 「青少年の簡素な旅行のための宿泊施設」であり、野外活動を通して、青少年の健全な育成を目的として運営されているものである。

* 会員個々の活動を YH 活動とし、YH 協会が推進して行くのを YH 運動として述べる。

した文化生活の向上が、私達のYH運動の正しい姿をくずし、そのため自然は前ほど人をひきつけなくなったのです。YHは現在では、自然への入口ではなく、若い人達の出会いの場なのだといっているところもあります。これは大変残念なことだと申し上げねばなりません。

(中略)

健全なYH運動の発展のためにすべきことをいくつかあげてみましょう。最初にすべきは、YHは観光ホテルじゃないということをはっきりすべきです。そして足で歩いて確かめるホステリングの原則を守ることです。そのためには、ホステル網を充実し、自然を愛する、歩くのが好きな青少年を育てるために小、中学生に働きかけ、歩く日を教育課目の中に入れるようにしたらいいと思います。(中略)

健全な精神は健全な身体に宿るというギリシャの精神をYH運動に生かしてゆかねばなりません。(後略)

日本ではドイツと逆にYHの数が着々と増えていることと、学生が主体となって活動していることを除いては、ミュンカーが述べていることと共通していることが多いようである。

この運動の本質を知るため、その変遷を振り返ってみることが必要である。

2. 世界のユースホステル運動の歴史

種々の資料より年表を作成してみると表1のようである。

3. YH運動とワンダーフォーゲル運動

ワンダーフォーゲル(Wandervögel。以下WVと略す)は日本語で「渡り鳥」と呼ばれるが、wandern(徒歩旅行する、放浪する、遍歴する)する鳥という意味であり、19世紀末から20世紀初めにかけてドイツに起こった青年運動で、青年独自の運動として世界の青年運動史に特筆されるべき足跡を残している⁽³⁾⁽⁴⁾。

これはビスマルクの強権政策成功後ウイヘルム2世時代の虚偽の繁栄の中に生まれたものである。当時のドイツ帝国における「経済的奇蹟」は、ドイツの社会状況に急激な変化をもたらした。工業化・広汎にわたる鉄道組織・前代未聞の繁栄と国家主義・軍国主義などの不穏な精神等々。その結果⁽⁵⁾

(1)家庭の生活に変化が起こった。

産業が次第に機械工業化するにつれて農村人口が都市に吸収されていった。1世紀前には農村と都市の人口比率が4:1だったのに、1世紀の間に完全に逆の1:4になったのだから都市集中化のひどさが解る。多くの農民は経済的理由と憧れから父祖の土地を捨てて都市に走った。そこでとり残された農村の家庭と農民社会の構造が大きく変化してきたが同時に離村農家の都市生活もかつ

ての農村生活とは全然形を変えなくてはならなかった。

もう一つ、都市に隣接していた近郊農村は膨脹してくる都市の腕に村ぐるみ抱きすくめられ、その中で変化していった。そして新旧思想が対立し、その結果悲劇的な親子の反目、離反が深刻になってきた。

(2)親方と徒弟の間にあつれきが生まれた。

新しく生まれたドイツでは官僚的で非能率な国の行政機関が、企業家と労働者との関係を割いてしまった。そして労働者にはマルクスやエンゲルスの教えが魅力を持ってきて、「階級闘争!」「平等の権利!」という二つの合言葉が標語となり、各地の都市には労働運動が燃え上った。その結果、労働者は、社会と国家に対する感情を失っていた。そして、1870年以来、労働力が不足するという現象を生んだ。

(3)君主制が次第に威力を失い、代って悪名高い官僚主義が根を張って来た。

官僚主義は国民の自由を強く縛った。国民は正確な細かい規則のワクの中にはめ込まれていた。

(4)超自然主義、殊にローマカトリックの教義は農村と農民の生活に大きな影響力を持っていたが、工業化によって農民が都市に吸収されるに従って、カトリックはその部分だけ地盤を失っていった。

一方都市でもプロレタリアートが増えるにつれて、彼らは公認宗派の非人間性と、時の政治の非道を鳴らして来た。その結果マルキシズム社会主義的世界観を喜んで迎え入れ、キリスト教的世界観を否定して、これを棄て去った。教会自身も又信頼を失っていた。また中産階級の中にも進化論が唱えられ、バイブルの原理批判が行われるにつれて、「宗教は阿片なり*」という見解が浸透して行った。

(5)学校教育は色々の教育方針があるにもかかわらず、その中の最も悪い一つを採用した。

教育界は予め「青少年の進むべき道を決めて、否応なしにその方向に導こう」とした。

沢山の科目で過重な負担をかけながら、旧思想と旧制度の詰め込み主義で臨んだため、生徒の勤勉さと自主性と向学心を全く殺してしまったのである。学校教育が無力になると、それだけ社会教育が大きな役割を果さねばならない。ところが困ったことには、社会事情が強く影響して、中産階級の家庭でも教育は二つの性格を持っていたのである。一つは社会悪から子弟を守ろうとして、社会の古い規律や道徳のたがを緊めて永遠の「無邪気さ」を要求する一方、その反面で「前進!」「前進!」の気運に押されて月足らずの「早熟児」の生まれることを希望した。その結果、青少年は旧思想・旧制度と新思想・新社会の間、あるいはこのちぐはぐな要求や期待の

*「宗教は民衆の阿片である」レーニン(1870-1924)社会主義者

中に立って全くほんろうされた。

学校ではスポーツの時間は無いに等しかった。身体の訓練は週2時間の器具体操に限られてしまった。(後にウイヘルム2世の特別の指示によって3時間になったが)それで多くの生徒に近視・扁平胸・肩下がり・扁平足・筋肉虚弱の現象が現われた。

また教育法の非人間性と、教育論の誤りと、杓子定規な高圧的な権威のために良い教育家は徐々に脱落して行った。

以上のことから多数の青少年が世間の真似をして社会悪の渦の中に引きずり込まれた時、いまましい世の有様を目の当りに見、大人達が無力であれば、青年の理想主義が燃えなくてはならなかった。ドイツではその火はわずかについえなかった者の心に炎を吹き出した。すなわち中産階級の子弟の一部にこれに抗して、許し難いとする者が出て来た。

彼等は俗悪軽薄なブルジョア生活への反動、親達の盲目的伝統継承への反発から、自然の純粋さへの復帰を求め、旅行必需品を背負い、農家の納屋、野外に眠り、田園山野を旅してまわった。この新しい「生活方法」はベルリン郊外のシュテグリッツに起こり、ベルリン大学に伝播した。ギターとリュックサックを肩に、田園地方を歩きまわりながら古いフォークソングの再発見、都市と地方の接触の再建につとめてきたこの生活方法は、一般社会の“反逆児、としての非難の声をよそに多くの青年達の支持を得て、やがてドイツ全土にのびたが、時のヨーロッパ各国にも大なり小なり同じ性質の不安があり、青年の現代批判と正義感と情熱はやがてドイツの国境線を越えて運動を外に導びき、これがついに全世界の青年運動を揺り動かした。

YH運動を始めたシルマンもこのWV運動に無関心ではなかった。

カール・フィッシャー Karl Fischer がシュテグリッツでWVののろしをあげた年、シルマンはプロシアのケーニヒスベルグ近くの小学校で教えていた。そして機会をつかんで生徒を野外に連れ出していた。

WVの青年達はドイツ中産階級の中でも選ばれた少数、せいぜい5万人にすぎなかった。更にろくな寝具も持たずに農家の納屋に泊ったり、野外で寝る等ということは誰にでもできるものではない。それは20才前後のWVのエリート達には魅力はあっても全ての青少年に通じるのではなく、特に小学生の場合はなおさらであった。一般の青少年が自然の生活を楽しみ、その生活の喜びにひたるには、簡素で安価な宿泊設備をそなえ、しかもしっかりした監督者のいる所がどうしても必要だったのである。

この必要に気づいたのがシルマンであり、アルテナで

二度目に移ったネッチェ・スクール(最初に教室を開放してホステルにした)にいた時書いた「旅行許可願」は当時のシルマンの考えがうかがわれて興味深い。

「賜暇願い(セブン・マウンテン修学旅行のため)

ヒルシャイト教育検査官・パルゾン・ケップ殿

リヒアルト・シルマン

閣下!

長年にわたって私は、有名なベルリンのWVにならって(太字筆者)学校の休暇中、徒歩旅行を指導してまいりました。少年達が実社会を踏み出す前に、自分自身の体験によって田園の美しさを知り、それを賞讃するようにならなければなりません。それにはカバンを背に、最小限の旅費をポケットに入れて、町から村へ、野から山へと歩き回ることです……(後略)

WV運動に共鳴して彼はその良さを知れば知る程、エリートでない一般の青少年を自然の中に遊ばせたく思ったのである。

シルマンのヘヤベルグ Herberg(簡易宿泊所)運動は最初は反対に合ったが、各方面から次第に関心を引き、また同僚や有志の献身的な努力でどんどん発展していったので、その頃各地の学校や教会や体育館が少年だけのヘヤベルグとなり、1914年にはウエストファーレン州地区やラインランドとヘッセンに200個所のヘヤベルグ(宿泊人員3万人)をつくることに成功していたのである。

この時WVの申し入れでシルマンのYH運動との間に協定ができ、相互に施設を利用し合えるようになったことは、大きな収穫であった。かくて全ドイツにヘヤベルグの「巢」の網ができ、青少年が「巢」から「巢」へ渡り歩いて行ったのであった。

WVは第一次大戦でそのメンバーのほとんどを失い、その後復活された運動もやがてナチスの抬頭によって、青年組織ヒットラー・ユーゲントに吸収されて、歴史の上からその姿を消してしまった。

4. ドイツの国家社会主義とYH運動

ドイツにおいて国家社会党が政権に就くやYH運動は根底から脅かされるに至った。⁽⁶⁾⁽⁷⁾1933年4月11日(ナチスの政権獲得後二ヶ月足らず)ドイツの新聞はドイツ、ユーゲントヘルベルゲン Jugenherbergen(ドイツYH協会)がヒットラー青年隊に取って代られたことを発表した。ナチスの地区指導者ラウターバッヒャーは次のように宣言した。

「我等はドイツYHを破壊せんとするものにあらず、ただここに至って『ドイツ的』な運動に向を変えたのみである。ドイツYHがマルクス主義の害毒の温床とならんには、又ドイツYHがその所有施設を黒人や支那人の

便に供さんとせば、最早ドイツ青年に奉仕するものとは言えないのである……我等が総統アドルフ・ヒットラー Adolf Hitler (1889—1945) に従わざる教師は全て今後の同協会の訓練教程より除外されるであろう」国の青少年統御は国家社会党の指導者達の最初の達成目標であり、そのため、あらゆる政治的・宗教的信条の青年を差別なく厚遇する独自の運動の存在は許すことができなかったのである。すなわち1932年の第1回国際YH会議での決議の一項「ホステルは人種・宗教・言語の区別なく万人に開放すること」という崇高の精神を踏みにじったのである。

過去25年間、教師、青少年団体、都市当局の協力により営々と築き上げられたドイツYH協会は、ハンブルグ出身の地区指導者ヨハネス・ローダッツ Johannes Rodatz という若い実業家の絶対的な支配の下におかれることとなった。彼はYH運動には何等の経験もなく、ただナチスの忠実な一党員であったに過ぎない。多額の金を費して新しい大きな建物を建設したが、それはYHというよりは、ドイツ青年の軍国主義計画の一翼を担う「青年兵舎」という方がよいものであった。

この運動に一生を捧げた名誉書記ミュンカーは1933年事務所がヒルヘンバッハよりベルリンに移ったのを機に職を辞した。シルマンは名誉会長の位置を与えられてその職にあり、しばらくは国際YH連盟会長の職務を続けたが、ナチス党との関係が次第に悪化し（彼はその党員ではなかった）1936年には国際YH連盟会長の職を強制的に解かれた。その直後彼はパスポートを没収され、事実上は囚人としてナチス統治時代の最後までグレーヘンヴァイスバッハ（タウヌス）という小村につながれた。

ドイツYH協会を掌握することになったナチスは1933年の第2回国際YH会議で大々的に誇示宣伝した。会議出席者は先年のドイツ及び自国において見られるYH活動（及び一般青年活動）と当時ドイツ第3帝国が誇示するものとの間隙がいかに深く、広いものであるか憂慮をもって見守ったのである。

ドイツは第3回国際会議でダンチヒ自由都市を、第4回に北スレスヴィッチ（デンマーク）、トランシルバニア（ルーマニア）を、第5回にラトビア及びオーストリアを新会員として会議に加え、着々と衛星協会国を作り上げ、ナチス・ブロックを支援させた。

第5回会議ではナチスブロックと他協会の反目が増大し、第1回会議を支配した相互の信頼感是不信の念に変わった。

第6回会議ではドイツYH協会代表は現状調査委員会（連盟の状況及び組織を全て監査するため第5回会議で設けられた）において連盟における地位の増大をはかった。しかし彼等とその支持者は票数で他議員を上廻らな

かったので譲歩せねばならなかった。

その結果1937年7月28日ドイツ協会は国際YH書記長に書簡を送り、建設的協力の可能性を期待し得ない旨、ドイツは国際YH連盟から脱退する旨を述べた。

リヒアルト・シルマンは最早連盟会長としての地位を維持し得ぬことを知り、1937年7月29日に書簡を送り、会長の職を辞任すると共にパリ会議には出席できない旨を伝えた。それまでできる限りはナチ協会に対し彼を支持して来た国際YH連盟も、事ここに至っては、その辞表を受諾する以外に道なしと覚った。

現状調査委員は詳細にわたる規約草案を作成したが、新事態に処し、ドイツ復帰の門戸を開けておくため、会議はこのドイツ脱退の原因となった規約を受理しないことに決定した。そして別途に、現状調査委員が、最初の構想を圧縮して作成したごく短い簡単な条文を採択することに一致した。当時の事態がいかに困難であったかは、1932年の国際YH連盟の創始者達が不可決と考えていた相互自由利用権を、双務協定で処理するために規約から除いたことからもうかがわれよう。

第6回会議で選挙された新執行委員会は、ドイツを国際YH連盟に復帰させるため、妥当な範囲で、できるだけ努力をするよう指令され、会議の意を体してドイツを会議に復帰させた。

ドイツは会員資格を抛棄した1937年の数ヶ月の間に国際YH運動の1機関を創設した。これは対抗的な国際事務局のようなもので、全衛星協会の中心となった。この事務局には特殊な任務を負わすことができたわけである。国際連盟に代ってYH国際普及週間を組織しようと試みたが、多大の努力を払ったにもかかわらず、大した成功は収めなかった。

第7回会議では新委員の選出に当り、各個人の国家的自尊心が露骨に表面化した。ナチ協会は全て団結して主導権を取戻そうと思った。自由主義的協会と全体主義的協会の対決が行われ、自由主義陣営に有利に終った。

第2次大戦が勃発し、ドイツはポーランドに侵入し、そのため1939年夏の会議は流会に追いやられた。参加会員協会は全て、当時尚中立であったオランダの書記長メイリンク L. Meilink が管財人として行動するよう委任することに一致した。このときナチスはオランダYH協会の幹部をその任より追放し、オランダYH事業を乗取ったが、この試みは失敗に終った。

ドイツ協会は全ての書類を押収し、記録文書をベルリンに海上輸送したが、そこで結局連合軍の爆撃により消滅してしまった。しかし約3,000オランダ・フローリンの金はオランダに秘匿され、戦後の再出発の裏付となった。

第2次世界大戦に際し、WV運動はヒットラーに対

し、「エーデルワイス」「バック」と呼ばれるような反戦運動を行なったが、ドイツに占領され、多くのYHは閉鎖され、或いはナチスにより強制的にその青年組織に合併された欧州諸国ではYH活動をしていた者の大多数もレジスタンス運動にその道を見出したのである。あのWV運動の烈々たるレジスタンスの精神を受け継いでいたのである。

大戦が終わった時、ヨーロッパの大部分の国におけるYH運動は殆んど絶滅したかと思われた。建物は破壊され、あるいは徴発され、設備は略奪され、管理人や職員は四散していた。YHが住居や学校の建設、あるいはそのための緊急を要する事業に対抗して公共資金を得られると思えなかった。しかしYHの復興は思いもよらず早いものであった。1947年には戦前YHがあったヨーロッパ諸国にはすでに500以上のホステルができていた。そしてこれらのホステルでは外国の旅行者が170,000以上の宿泊数を記録した。国際奉仕団が作られて、彼らはいくつかのホステルの再建を手伝った。一部の協会は復興途上のドイツYH運動に関心を払い、奉仕団を送り、青年及び管理人の交流を促進して援助に努めた。

シルマンとミュンカーは再建の仕事を始めるために退職を取り消し、ドイツYH協会は公式に1949年10月に再建されたのである。そしてその結果、ヨーロッパ全体のホステル数にさらに500のホステルがつけ加えられたのである。

5. 旅行形態の変化など

動力利用の交通機関の急速な発展と増加は階級と年齢の区別なしに実現をみて、バイクやオートバイや小型自動車やバスを使って旅行する青少年の大群の強硬な宿泊要請に直面することになった。ヨーロッパのYH協会は彼らの要望に譲歩し、イギリスのYH協会だけが「自力で旅行しよう」という純粋な教義を守りぬいた。(しかし最近イギリスYH協会も自動車、オートバイでのホステル利用を許可した)

国際YH会議でもこの問題は再三取りあげている。

すなわち第11回会議(1949年)には「ヒッチ・ハイキング」についてあらゆる論議が集中したが、会議はヒッチ・ハイキングがホステルの基本原則、即ち自主独立、田園の踏破、自然の愛惜等の精神に添わないとしてこれに反対の立場をとった。単なるハイキング、自転車旅行だけを助長して行く方針であったのである。

第15回会議(1954年)でも研究委員会が「団体旅行および青少年旅行機関」という問題を審議した際、バスによる団体旅行の得失について長い討議が行なわれた。

第16回会議(1955年)ではホステルへの自動車利用者とバス利用者をホステルに入れることについて、さらに

立ち入った討議が行なわれたが結局まとまりがつかなかった。

第21回会議(1960年)においては「YHの使用に関する基本原則」についての討論で、副会長のグラッスル(ドイツ)が「YHとは自己の努力により旅行をする者のためのものである。例えば徒歩、自転車、スキー、ボート等による。大多数の協会はホステラーが自分達で公の交通機関を利用するか否かを決めるのにまかせているが、いくつかの場合はモーターを利用するものを許さない。また自己の努力によりという意味は旅行のプランなどは自分達で作るべき意味であって、商業的交通公社などをYHの協同者として認めることはできない」と述べている。

筆者は1966年7月から8月にかけて、YH宿泊者について旅行形態を調べたが⁽⁹⁾、図1のようであった。

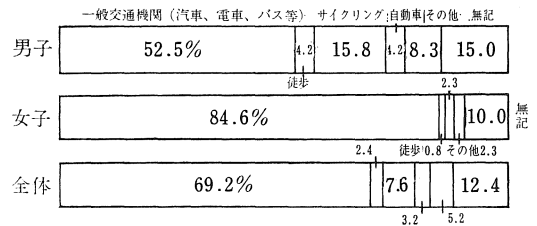


図1 今回の旅行形態

一般交通機関(汽車・電車・バス等)利用が圧倒的に多い。特に女子は84.6%にも及んでいる。

女子は徒歩も少く、サイクリングは無く、ほとんど交通機関に依存している。YH活動の本来の目的からすれば好ましくない。時間に余裕があれば、もっと徒歩、サイクリングなどで旅行すべきである。

マイ・カー時代と共にホステラーの中にも自家用車あるいはその他でホステリングを続ける者が現われている。これに関して「ドイツ青少年運動——建物利用による——第1集」を訳した佐藤信一は、「ドイツでは何が問題になっているか。その一つは動力利用のホステラーは、協力、奉仕の精神に欠けている点を指摘している。これは日本でも早晩起る問題だろうから対策を立てるよい示唆といえよう(後略)」といっている。

筆者の会った自動車でのホステラーのマナーは悪くなかったが、自動車旅行はYH活動本来の主旨から外れていると思う。

¹⁰⁾ YH新聞にも次のような意見が載っている。

「ホステルまではぜひ徒歩で

駅から徒歩で、わずか二、三〇分足らずのホステルまで、しかも昼の道をバスならまだしもタクシーで乗りつけるホステラーの意外に多いことを皆さんご存知でしょうか。そこで私の考えるのにペアレントさんもこんなホ

ステラーに対しては正直『おつかれさま』と心からいいにくらうと思います。駅からホステルまで歩いてやって来る人と、タクシーで涼しい顔でやって来る人では、もはやYHの真精神すなわち、簡素な旅行を目的としたホステル理解者ではないわけです。もちろん、今日の交通事情では歩くことは容易でないこともよく承知しています。といて、ホステリング中は努めて自然に親しむよう、また直接その土地にふれるように歩くことをさかんに提唱しているではありませんか。何でもないようですが、ぜひ一考したいものです」

全く同感である。

図1の「その他」はヒッチハイク及び色々な乗物の組み合わせがあった。(例えばサイクリングと一般交通機関、徒歩とサイクリングなど)

ヒッチハイクについては国際会議で、ヒッチハイクは自力による旅行とは認められない、故にホステリングには好ましくないと申し合わされた。一方日本YH協会理事の兼松保一はその著書⁽¹⁰⁾でヒッチハイクについて次のように述べている。「欧州YH旅行の計画とコース」の章で「ヨーロッパのハイウェイはどこへ行ってもリュックサックをかついだこのヒッチハイカーを沢山見かける。旅行手段としては最も費用のかからない方法であるが、急ぐ旅行をするには適さない。すべては他人まかせの運まかせ、ひまど勇氣のある人は試みられたらよい」と。

確かに乗物で行くということでは自力で旅行するとは認められないが、見も知らぬ人の車、なかなか止まらない車を止めて乗る意志と努力は、一般交通機関による安易な旅行よりは優ると思う。

自動化された旅行は若者達に遠くへの旅行を可能にし長距離のホステリング、ヨーロッパでは特に南に向っての旅行の急速な発展をもたらした。1965年には地中海沿岸諸国(フランスを含む)はホステルの国際利用統計からみると1950年には14%であったのに30%を占めるようになった。このことは新しい地中海諸国イタリア、チェコ(共に1949年国際YH連盟に加入を承認された)、イスラエル(1954)、エジプト(1955)、スペイン(1957)、ギリシャとポルトガル(1959)にYHの建設がはじめられたことを意味する。

さらにまた、増加する自動車利用は子供連れの家族の旅行も容易にしたために、安い費用で家族旅行ができるための宿泊施設に対する要望が生じ、これに対してはいくつかのYH協会ではこれをみだす義務があると感じた。これはスエーデンで始められ、1964年にはホステルの77%が家族部屋をもつに至った。そしてじきにこれは他のスカンジナビア諸国にも広まった。

6. 結 語

生活水準の向上や文明の発達と青少年の世間ずれなどが、シルマンがこの運動に刻みつけた簡素な生活と共同生活における規律というYH哲学ともいべきものに対する不満を生んでいる。

この不満はとくにシルマンの母国ドイツで表明され、統計によればドイツ協会の歴史はじまって以来、はじめて個人利用者の数が減っているのである。それは一部分の青年がホステルよりもホテルあるいは青少年利用のゲストハウスやキャンプ用地の利用を選び、ホステルをすてたからである。その方が彼らに対する監督が殆んど行なわれず自由が楽しめるからである。

自力での旅行のためにドイツ鉄道ではいくつかの駅に自転車をおいて貸し出しをしたりしているとYH新聞の海外便りは伝えている。YH運動の本来の姿を少しでも取り戻させようとの願いからであろう。

日本でもホステリングの観光旅行化、マナーの低下などが見られるし、41年頃から始まった夏の北海道でのバスホステリングなどは本来の運動とはかけ離れているとも思われる。

しかし最近ほうぼうの支部協会で歩行テストや“歩け歩け”など徒歩旅行の動きが起っているのは喜ばしいことである。

シルマン時代のホステリングをそのまま今日実行することは容易ではないが、少しでもその精神をくんで自力での旅をしたいものである。

最後に私は実際ヨーロッパのYHの今日の姿を見るために近い内にホステリングに出てみたいと思う。

引 用 文 献

- 1) 横山祐吉：リヒアルト・シルマン先生の追想 日本YH協会：「リヒアルト・シルマン」ユースホステルの祖父 P104
- 2) YH新聞 昭和40年4月11日号
- 3) 兼松保一：野外活動—キャンプとYH—P151~154 ベースボール・マガジン社
- 4) 大島鎌吉：世界を遍歴する靴は兵隊の靴よりも強い ベースボール・マガジン社
- 5) 大島鎌吉：ワンダーフォーゲル 朋文社
- 6) 国際YH連盟：ユースホステルの手引き 日本YH協会
- 7) 国際YH連盟：国際ユースホステル 日本YH協会
- 8) 日本YH協会：ホステリング、第5号 1960 P11
- 9) 中村樗：ユースホステルに関する研究 東大大学院修士論文 1966
- 10) YH新聞 主張欄 昭和40年12月11日号
- 11) 兼松保一：野外活動—キャンプとYH— P223

- 12) YH新聞 昭和43年3月11日号
 その他
- 1) グレアム・ヒース：リヒアルト・シルマン 日本YH協会
 2) THE INTERNATIONAL YOUTH HOSTEL MANUAL 1964
 3) Deutsher Jugenherbergswerk：“Jugent unterwegs” 1962
 4) International Youth Hostel Federation：
- Analysis of Overnights recorded by Foreign Visitors 1964
 Statistical Report of the International Youth Hostel Federation 1967
- 5) 兼松保一：教育としてのYH 日本YH協会
 6) 全国都市体育研究協議会編：立ち上るドイツ青少年万有出版
 7) 全日本学生ワンダーフォーゲル連盟：ワンダーフォーゲル年鑑 創刊号 昭和35年
 8) 今村嘉雄：体育史資料年表 不味堂

表1 世界のユース・ホステル運動史年表

| 年 | 事 項 | 一般、体育関係資料 |
|------|--|---|
| 1885 | ギド・ロッター（オーストリア）最初の「学生、教師ホステル」をボヘミアのホーベン・エルベに建設，それに続いて少数のホステルがドイツ及びオーストリアに生まれ，中学，大学の男子学生（16才以上）だけに利用させた。 | 1882 独，墺，伊三国同盟成立 1885 アメリカ体育振興連盟（今日のアメリカ保健，体育，レクリエーション連盟）ブルックリンで結成 |
| 1901 | ベルリン郊外のシュテグリッツでカール・フィッシャーがワンダーフォーゲル運動の口火を切る。 | 1890 ビスマルク 辞職，ウイルヘルム2世親政 1896 第1回国際オリンピック（アテネ） |
| 1908 | ワンダーフォーゲルの歌の集大成「ツーフガイゲンハンスル」刊行される。 | 1904 日露戦争 |
| 1909 | ドイツの小学校教師リヒアルト・シルマン（1874～1961）が徒歩旅行の途中，ユースホステルということを見つけ。 | 1908 第4回オリンピック（ロンドン） 1909 第1回「ドイツ大学オリピヤ」ライブチヒで開催 |
| 1910 | アルテナのシルマン自身の学校「イン・デア・ネッテ」にユースホステル初めて開かれる。 | 1910 日韓併合 米国「女子体育指導者協会」成立 |
| 1912 | ザウアラント山岳クラブの一部門としてユースホステル委員会が成立され，シルマンが委員長となる。このときウイルヘルム・ミュンカーはユースホステルの事務所にヒルヘン・バッハに在る彼の家屋敷を提供する。 | 1912 第5回オリンピック（ストックホルム） 日本初参加 |
| 1913 | ドイツ，オーストリア，アルペンクラブから一つの派ができ，後にドイツ，ユースホステル協会のバイエルン地区グループの活動の基礎を築く。 | 1913 全米フットボール連盟成立 |
| 1914 | ユースホステルの数は83となる。 | 1914 第一次世界大戦の勃発（～18）日本対独宣戦布告 |
| 1919 | ドイツ・ユースホステル協会がミュンカーを名誉書記長とし，シルマンを会長として正式に結成される。 | 1916 第6回オリンピック中止 1919 ヴェルサイユ条約調印ドイツ，ワイマル憲法 |
| 1920 | ポーランド政府は宗教公衆教育省の中に専門の局を設け，学校団体のためのユースホステルの発展を計る。 | 1920 第7回オリンピック（アントワープ）体育重視のドイツ内閣令出る。ドイツ体育委員会「ドイツ体育大学」創設 |
| 1921 | ホステルの数1,300，宿泊数50万となる。 | 1924 第8回オリンピック（パリ） 1925 ライプチヒ大学に体育研究所創設，ブロイセンに体育研究所設立 ハンガリー体育大学創立 |
| 1925 | スイスにユースホステル組織設立される。 | 1928 第9回オリンピック（アムステルダム） 1929 世界経済大恐慌（～30） 1930 ロンドン海軍軍縮会議 |
| 1930 | フランスとノルウェーにユースホステル誕生。 | |
| 1931 | ホステルの数2,100，宿泊数430万に増加。ドイツ，イングランド，スコットランド，オランダの各協会書記長はドイツのヒルヘンバッハにシルマンを迎えて参集し，ここに国際会議の構想生まれる。 | |
| 1932 | 第1回国際ユースホステル会議が10月20日オランダ，アムステルダム YMC A ホテルで開かる。会員証，ホステル規約，指導原則，具体的協力事項などを決定。ドイツ（～39），チェコスロヴァキア<南独>（～39），オランダ， | 1932 ナチス・第一党となる 上海事変，5.15事件，第10回オリンピック（ロスアンゼルス） |

| 年 | 事 項 | 一般、体育関係資料 |
|------|---|---|
| 1933 | <p>スイス、ノルウェー、デンマーク、ポーランド（～39）ベルギー（フランドル）、フランス、イギリス、アイルランドが加盟。</p> <p>ドイツ・ユースホステル協会はヒトラー青年隊に取って代られる。協会はナチスの忠実な党員ヨハネス・ローダッツの絶対的な支配下におかれる。名誉書記ミュンカー辞職。</p> <p>第2回国際会議ゴータスベルグで開催。</p> <p>ナチス大々的に誇示宣伝。</p> | 1933 ヒットラー、政権を獲得 日本、国際連盟を脱退 F. ルーズベルト大統領に就任、ニューディール政策を行う。 |
| 1934 | <p>スコットランド、ルクセンブルグ、ベルギー（ワロン）、米国加盟。</p> <p>モンロー及びイザベル・スミス夫妻が、マサチューセッツ州ノースフィールドに米国最初のホステル開設。オーストラリア、ニュージーランドもこれに続き、仏領北部アフリカにも運動の最初の芽が出はじめる。</p> <p>第3回国際会議イングランドのウィズリー城で開催、組織を強固にし、規約及び相互自由利用協定を簡素化、国際図解文字採用。</p> <p>北アイルランド及びダンチヒ自由都市（～39）加盟。</p> <p>ナチス代表はダンチヒ代表の支援を受ける。</p> | 1934 ソ連の体育組織に BGTO 章種目導入 日本、ワシントン海軍条約破棄 |
| 1935 | <p>第4回国際会議、ポーランド・クラコウで開催。</p> <p>北スレスヴィッチ（デンマーク）（～39）、トランシルバニア（ルーマニア）（～39）、両者ともドイツの傘下組織—及びチェコ旅行クラブ（～49）加盟。</p> <p>新規約草案準備委員任命。</p> | 1935 ドイツ再武装宣言、 ソ連体育科学者全国総会開催 イギリス「中央・身体的レクリエーション委員会」（CCPR）成立 |
| 1936 | <p>第5回国際会議 ラトビア（ドイツ傘下）（～39）、オーストリア（～49）加盟。両者ともナチスプロクスの援軍を成すもの。スエーデン、蘭領東インド、フランスの一般人同盟はゲストとし迎えられた。</p> <p>ナチスプロクと他協会の反目が増大。シルマン、国際YH連盟委員長の職をナチスより強制的に解かれ、グレーヘンヴィースバッハ（タウヌスヒル）という小村につながる</p> | 1936 日本、ロンドン軍縮会議脱退 2.26事件 第11回オリンピック（ベルリン）ヘルムス・ワールド・トロフィー創設 日独防共協定調印 |
| 1937 | <p>フランス青年宿泊所連盟が一般青年宿泊所同盟と合併。</p> <p>第6回国際会議が万国博覧会の最中パリで開催、国際ユースホステル連盟はユースホステル運動の性格と理念とその世界的な普及状況を華々しく展示。カナダ、エストニア（～39）加盟</p> <p>7月28日、ドイツ協会は国際ユースホステル連盟書記長に書簡を送り、建設的協力の可能性を期待し得ない旨、ドイツは国際ユースホステル連盟から脱退する旨を述べる。7月29日シルマン、会長を辞任。</p> <p>国際連盟を国際協力の真に建設的原動力たるよう20か条の具体的項目を盛り込んだ「事業計画」を採択。執行委員会は会議の意を体してドイツを会議に復帰させた。ドイツ・ユースホステルは会員資格を抛棄した1937年の数カ月の間に国際ユースホステル運動の1機関を創設。これは全衛星協会の中心となった。</p> | 1937 日独防共協定 英国「体育、レクリエーション法」成立 ソ連中執委、スポーツ団体にレーニン章を授けることを決議 |
| 1938 | <p>第7回国際会議、スイスのバーデンで開催。</p> <p>ロートベルク（バーゼルの近く）で国際青年ラリーが成功裡に開かれ、この種の集会の口火を切る。フィンランド加盟。新委員の選出に当り、各個人の国家的自尊心が露骨に表面化、ナチ協会は全て団結して主導権を取戻そうと図ったが、自由主義陣営に有利に終る。</p> <p>国際図解文字使用一般化、ドイツとの清算制度（ホステル・ヴァウチャー）ユースホステル運動に関心をもつ国との連繋の緊密化（イタリア、ポルトガル、エジプト、パレスチナ）機関誌刊行、国際会員証の統一発行等実施。</p> | 1938 ミュンヘン会議（英、仏、ズデーテンのドイツ割譲承認） |
| 1939 | <p>多くのユースホステルは閉鎖され、或いはナチスにより強制的にその青年組織に合併された。</p> | 1939 第2次世界大戦勃発（～45） ソ連、体育デーを制定 |
| 1945 | <p>デンマーク協会の呼掛けで、デンマーク、ノルウェー、スウェーデン、フィンランド各協会のユースホステル会合を開催し、国際連盟の会長、書記長の出席を招請。</p> | 1945 ヤルタ会談、ポツダム宣言発表、第二次世界大戦終る 国際連合成立、ユネスコ創設 |
| 1946 | <p>第8回国際会議がスコットランド、ロッドホローモンド・ユースホステルで開催。</p> <p>スエーデン協会（S.T.F）、ニュージーランド加盟、シルマンとミュンカーもドイツを代表してオブザーバーとして出席。</p> <p>再建のため国際奉仕団の考え促進、管理人（ベアレント）交流、国際機関誌刊行、国際バッジ作成決定。新規約により国際ユース・ホステル連盟（IYHF）と呼称、ユネスコからオブザーバー出席。</p> | 1946 ソ連優秀体育者章設定 極東軍事裁判開延 |
| 1947 | <p>第9回国際会議、オランダ、ブラリクムで開催される。ユネスコ、アルジェリア、パレスチナ、チュニジアよりオブザーバー。オーストリア再加盟、オーストラリア、モロッコ加盟。</p> | 1947 日本国憲法実施 |

| 年 | 事 項 | 一般、体育関係資料 |
|------|---|--|
| 1948 | フランス3つの対立的協会が連合、フランス青年宿泊所協会を創立。復興途上のドイツ・ユースホステル運動に、奉仕団を組織して援助。 | 1948 国連、世界人権宣言採択 |
| 1949 | 第10回国際会議 アイルランド、ダブリンで開催。国際歌謡集刊行。 第11回国際会議 デンマークで開催。 イタリア、チュニジア、アルジェリア（～1957）加盟。 ホステル相互自由利用の容易化、会員の交流等審議、ヒッチハイクについて論議し、反対の立場をとる。シルマンとミュンカーは再建の仕事始めるために退職を取り消し、ドイツ・ユースホステル協会は10月に再建される。英国ユースホステル連盟、290の宿泊所を開設。 | 1949 北大西洋条約調印、中共成立宣言 |
| 1950 | 第12回国際会議 英国アッシュリッジで開催。ドイツ再加盟、ザールランド加盟。（～56）前会長ジョン・キャッチプール及びシルマンを表彰。 | 1950 朝鮮動乱はじまる。 ソ連体育スポーツ委員会、優秀トレーナーを表彰 |
| 1951 | 第13回国際会議 ウィーンで開催。 仮会員制度適用 インド加盟。 「ユースホステルの最低基準」というテーマで討議。 | 1951 ユネスコ、日本の加盟承諾、対日講和条約（サンフランシスコ） ソ連オリンピック委員会IOCに加盟 |
| 1952 | 第14回国際会議 ローマで開催。 非会員国からの参加者に国際YH会員証を発行する方式実施決定、国際YHハンドブックにヨーロッパ全YHの所在地を書き込むことを認める。アイスランド、パキスタン加盟。 | 1952 第6回冬季オリンピック（オスロ）第15回オリンピック（ヘルシンキ） |
| 1954 | 第15回国際会議 ザールで開催。 日本、イスラエル加盟。 技術開発基金設定。国際YH案内刊行。バスによる団体旅行の得失について討議。 | 1953 朝鮮休戦協定調印 1954 米、ビキニで水爆実験 ジュネーブにて極東平和会議 インドシナ休戦協定調印。 |
| 1955 | 第16回国際会議 オスロで開催。 エジプト加盟。 ホステルへの自動車、バス利用について討議。 | イタリアでの世界体操選手権で日本男子団体2位 イギリスでの世界卓球選手権大会男女とも日本優勝 |
| 1956 | 第17回国際会議 スコットランドで開催。ソ連、ナイジェリア、スペイン、北ローデシアからオブザーバー。 | 1956 第16回オリンピック（メルボルン） |
| 1957 | 第18回国際会議 オランダで開催。 アルジェリア協会を会員から一時除く。 チュニジアYH協会の解散を承認。 スペイン加盟。 | 1957 ソ連、人工衛星打上げに成功 英、クリスマス島で水爆実験 |
| 1958 | 第19回国際会議 ブラッセル万国博覧会の大講堂で開かれる。 ポーランド、南アよりオブザーバー。 第1回アジア地域会議 インド、イスラエル、日本、カンボジア、ホンコン、タイ、ニュージーランド参加。IYHFから事務総長R・オルセン参加。 | 1958 フルシチョフ、首相に就任 |
| 1959 | 第20回国際会議 ドイツのアルテナ城でYH運動50周年を記念して祝賀式典。ギリシア、ポルトガル加盟、南ア承認されず。 第2回アジア会議 インドで開催、8カ国参加 IYHF 執行委員ブラッドレー参加。 | 1959 ソ連宇宙ロケット発射 アメリカ第1号人工衛星打上 |
| 1960 | 第21回国際会議 バリのユネスコ本部で開会式、本会議は地中海沿岸サン・ラファエル近辺のブルリスで行われた。国際ホステリング色彩映画製作決定。ポーランド再加盟。 YH管理人会議がロンドンで開かれた。 | 1960 第17回オリンピック（ローマ） 仏、サハラ砂漠で原爆実験。 ケネディ大統領就任 |
| 1961 | アジア地域会議 イスラエルで開催。 マラヤ加盟。シルマン死す。 | 1961 ソ連超大型核実験（50メガトン）を強行。 ソ連初の人間衛星打上 |
| 1962 | 第22回国際会議 チュニジア開催予定を変更。スウェーデンのヘルシンボルクで開催。 リヒアルト・シルマン基金設定。 タイ加盟。 | 1962 ソ連、人間衛星2個のグループ飛行に成功 ジャカルタの第4回アジア大会、政治的問題で対立化。 キューバにおける米国の海上封鎖に対し、ソ連が核兵器撤回に同意したため一応核戦争の危機去る。 |
| 1963 | 第23回国際会議 アイルランドで開催。 中近東3ヶ国とブラジル、イランからオブザーバー、アルジェリア再加盟。 IYHF 加盟の最低基準決定。 | 1963 インドネシア、IOCに正式脱退を通告 |
| 1964 | 第24回国際会議 スペイン、マドリードで開催。 | 1964 第18回オリンピック（東京）中 |

| 年 | 事 項 | 一般, 体育関係資料 |
|------|--|---|
| 1965 | <p>レバノン, フィリピン, シリア, ウルガイ, タンガニーカよりオブザーバー・シリア加盟.</p> <p>アメリカ, アジア, オーストラレーシア地域を含む新しい IYHF ハンドブック第2巻の刊行承認.</p> <p>アジアの代表として横山祐吉が執行委員に選ばれる.</p> <p>第4回アジア地域会議 マラヤのクアラルンプールで開く.</p> <p>IYHF 執行委員会日本で開く.</p> <p>第25回国際会議 ポーランドで開催.</p> <p>ラリーでソ連, チェコ, 東ドイツ, ポーランドの青年が共産圏外からのホステラーと交歓.</p> <p>旅行補助基金設定.</p> <p>リヒアルト・シルマン訓練センター設立決定.</p> <p>南米でのユースホステル運動の発展ぶりが報告される.</p> <p>野外活動センターとしてのYHの利用及びYH旅行の準備, 実施, 価値評価について討議.</p> | <p>国初の核爆発実験成功. ベトナム危機深まる. コスイギン首相就任.</p> <p>1965 米, 北ベトナム爆撃開始</p> |
| 1966 | <p>第26回国際会議 ウィーンで開催.</p> <p>アルゼンチン, レバノン, セイロン, ケニヤ加盟.</p> <p>ホステル管理人の教育上および管理上の役割に関して討議.</p> <p>「ユースホステルの現在の性格と機能およびホステル利用者の要望の研究」について討議.</p> | |
| 1967 | <p>日本, 会員数45万人余を記録し, 数の上ではドイツを追い越し世界一位となる.</p> | |
| 1968 | <p>第27回国際会議及びラリー, ヨーロッパ以外で初めて開かれる. 東京において8月.</p> | <p>1968 第19回オリンピック (メキシコ)</p> |